



満濃池 空海の修築

その1

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

香 川には大小さまざまな溜池が点在し、独特の景観を見せている。年間降水量は全国平均の三分の二程度であり、河川は阿讃山地から瀬戸内海までの短い距離を、いっしょに流れ落ちてしまうので、平時は水が不足する。こうした風土において、溜池は欠かせない灌漑施設だった。

承平年間（九三一年〜九三八年）の『倭名類聚抄』によると、すでに現在の耕地面積の約六〇％に相当する田が拓かれており、この頃には今にある溜池の多くが築かれていたと考えられる。伝承によるとその多くは空海が掘ったという。

空海は水と縁が深い。彼の手によって湧き出たという「弘法水」の伝説は、北海道と沖縄を除いた日本全国に広がり、一、五〇〇編にもおよぶ。しかし、なぜ、いたるところで水を湧かして見せなければならなかったのか。それは、彼の故郷が水の工面に苦勞した、この讃岐だったからなのかもしれない。

そして伝承ではなく、史実として空海の名を留める最も有名な溜池といえば、満濃池にほかならない。金倉川を堰き止めて造った満濃池は、日本最大級の溜池で貯水量一、五四〇万ト、満水面周囲約二〇キロ、灌漑面積約三、二〇〇ヘクタールの規模を誇る。

寛仁四（一〇二〇）年に書かれた『黄農池後碑文』

には大宝年間（七〇一年〜七〇四年）に讃岐国司の道守朝臣が築いたとあるが、大宝年間から三百年も後に書かれたものであり、国司である道守朝臣の存在が他の史料から確認できないなど内容が疑問視されている。やはり、満濃池は空海が登場する修築工事によって、その存在が確立したと言うべきだろう。

『大師御行状集記』や『弘法大師行化記』などによると、弘仁十一（八二〇）年、讃岐国司からの願いによって満濃池建設のため、路真人浜織が築池使として派遣された。しかし、なにしろ大規模な工事であり、そのうえ労働力を確保できず一年たっても完成しない。そこで空海が呼ばれることとなった。

空海は地元の出身であり、民は父母のように慕っている。履物も蹴散らさんばかりに、迎えることになるところからだという。そして、まさに、その通りとなり、空海が来てから二カ月で工事は完成した。

工事中に空海が逗留した矢原家には、空海がアーチ状の堤体や、余水吐きなどの技術的な工夫を凝らしたという伝承があるらしいが、実際のところはどうだろうか。

大林組の試算によれば、修築工事全体では工期九カ月、作業員は延べ三八万三、〇〇〇人が必要となり、いくら人数を集めても二カ月では無理があると

している。つまり工事は、かなりの部分が進められており、最終段階で速やかな施工が必要な堤体中央部の盛立て工事に空海の力が求められののではないかと。ならば空海の役割は、利生を求め民を工事速成のための労働力として集めることであり、空海の技と伝えられた施工計画は他者によって、おね成されていたと考える方が妥当ではなからうか。（つづく）



満濃池を堰き止める土堰堤

【交通】JR琴平駅、琴電琴平駅近辺から自転車約40分。